

天正と慶長二期の特徴を持つ石垣

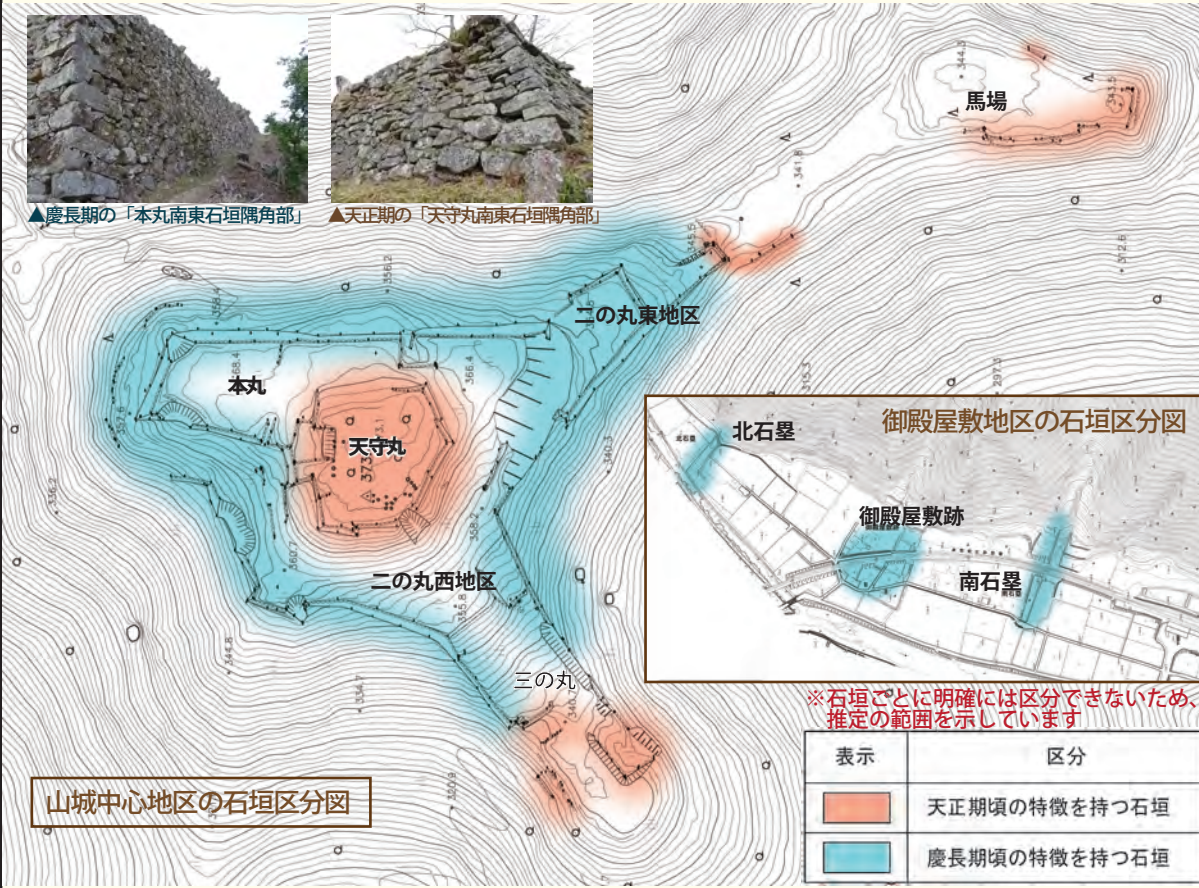
宇喜多期と池田期の新旧が残存する利神城



▲慶長期の「本丸南東石垣隅角部」



▲天正期の「天守丸南東石垣隅角部」



◆**戦国時代から近世の軍事拠点**
利神城は十四世紀代の赤松(別所)敦範築城の伝承を持ちますが、記録に明確となるのは十六世紀半ば以降で、城をめぐる合戦が知られます。天正五年(1577)、羽柴秀吉による播磨平定に際し、毛利・宇喜多方の佐用郡三城の一つ「別所中務と申者之城」(羽柴秀吉書状)とみえ、別所氏が城主であったと考えられています。豊臣期には備前の宇喜多秀家の支城のなつたと思われまます。慶長五年(1600)、池田輝政が播磨国五十二万石の国主となると、甥の池田由之に佐用郡二万二千石を与え、利神城の大規模改修を行わせ、城主や家臣の屋敷が設けられました。その後、岡山藩主の所領に組み込まれ、平福藩が成立しましたが、寛永八年(1631)、佐用郡は山崎藩主へ加増されたことに伴い、廃城となりました。寛永十七年(1640)に平福は旗本松平氏の所領となり、因幡街道の宿場として幕末に至り、歴史的町並みが現在も残っています。

◆**構築時期で異なる二種の石垣**
このような中世城館から近世城郭への変遷によって、山上の山城と

た石が多い。
◎積み方は比較的平らに揃い、石間の隙間が少なく緻密な印象である。
◆**「慶長期の石垣」の特徴**
◎比較的大規模な石垣である。
◎通称西山石と呼ばれる安山岩質凝灰岩が多く使われている。
◎築石部は加工度は低く不揃いで自然な丸みを帯びた大型が多い。石材間が開いている分、雑な積み方に見える箇所もあり間詰石も多い。石垣の表面は平滑ではないが、石材の頂点を結ぶと一定の石垣面を構成。
◎積み方は乱積みみの箇所が多い。

◆**戦国時代から近世の軍事拠点**
利神城は十四世紀代の赤松(別所)敦範築城の伝承を持ちますが、記録に明確となるのは十六世紀半ば以降で、城をめぐる合戦が知られます。天正五年(1577)、羽柴秀吉による播磨平定に際し、毛利・宇喜多方の佐用郡三城の一つ「別所中務と申者之城」(羽柴秀吉書状)とみえ、別所氏が城主であったと考えられています。豊臣期には備前の宇喜多秀家の支城のなつたと思われまます。慶長五年(1600)、池田輝政が播磨国五十二万石の国主となると、

山麓の石垣は、宇喜多期と池田期の新旧が混在しています。それぞれの特徴は、宇喜多期の石垣は天正期頃に見られる技術的な特徴を持つ石垣で、池田期の石垣は、発展した算木積みが見られるなど、慶長期頃の技術的な特徴を持つ石垣です。ただし、明確に分類できない石垣もあり、石垣構築時期の詳細な区分は、今後の検討課題と言えます。

◆**「天正期の石垣」の特徴**
◎比較的低い石垣が多い。
◎通称東山石と呼ばれる流紋岩質凝灰岩が多く使われ、割石か加工され



NO 3
2023
令和5年6月

国史跡 利神城かわら版

編集・発行
佐用町教育委員会教育課
〒679-5380
兵庫県佐用郡佐用町佐用2611-1
☎0790-82-2424

利神城跡は、戦国の世から近世初頭にかけて、播磨国北西部の軍事・政治的拠点として営まれた城跡です。高石垣を有する山城として、また山城と山麓の居館が一体として残る貴重な遺産です。本号では、利神城の成り立ちを振り返り、時代相によって異なる石垣の特徴をお伝えします。次号から、利神城跡の最も本質的な価値である石垣の現況を報告することになります。